

上演

2024年8月2日1校目
四国ブロック

徳島県立城東高等学校

「その50分」

第48回全国高等学校総合文化祭
第70回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

山形県立酒田東高等学校

白畑珠代

体育祭・文化祭準備を進める生徒たち。場所をめぐる争いを止めようとクラス委員長は冷静な話し合いを提案するが、生徒たちは聞くことを知らず、多数決によってその意見はつぶされてしまった。このような様子は、現在世界で起こっている戦争や内戦とリンクしている。劇を通して、戦争や内戦の実態や危うさを感じられた。

廊下に追いやられた生徒が団結するきっかけとなったダンスの練習チーム。一見ダンスの練習チームが悪者かのように見えるが、ダンスリーダーのコナツには「このクラスで勝って、最高の思い出をつくりたい」という思いがあったことが分かる。その本心がわからないままに争いが大きくなり、まるで悪者かのような見方をされていた姿がとても悲しかった。そして、嫌だと感じる相手の行動も、自分のためにやっているかもしれないと思うと、対立してしまったときに一度立ち止まって周りを見つめる姿勢が大事なのだと感じた。

また、24人いる生徒の中でアイリンは途中から「空気」として扱われていた。彼女はクラスが対立する状況の中で、中立を保とうとしていた。クラスの問題を前にどうすればよいか分からず、葛藤するその姿に共感した。「空気」になった後、彼女の声は誰にも届かず、クラスメイトが倒れていく様子を見ていることしかできなかった。現実生きる私達は、戦争や内戦を事実として知っているものの、その実態への理解は浅い。解決したいとは思っているものの直接動くことができない。もっと国や地域のことを知り、発信する努力をするべきだと思い知らされた。

また、観客に当事者意識をもたせる工夫の1つとして、客席全体を使った演出が挙げられる。劇の後半、劇中の生徒たちは観客に見られていることを自覚する。その後、何かから逃げるように舞台を飛び出して走り去っていく。この演出には、戦争や内戦をより身近なものとして考えてほしい、他人事ではないのだというメッセージが込められていると考えられる。また舞台上の教室は、両端の壁がギザギザになっていて、その先は闇に包まれていた。二人の生徒は、闇の先に一步踏み出すことを躊躇するが、この演出からも支援したいけれど一步踏み出すことが出来ない私達の現状が表現されていると思う。関わるのがどんなに怖いとしても、踏み出すための勇気を持つべきだと言われたような気がした。

